

# Japanese man In NY (ニューヨーク生活)

## 《ティナ・ターナー》



(Photo: Port Authority Bus Terminal on 8th Avenue)

いたのだろうか…、親しく接してくれる外国人の常連客も増えていき、今でも連絡を取り続けている当時の常連客もいる。

そんな中、自分はけて今の時代で言うイケメンなどと呼べる男ではなかったが、何度か外国人の女性客に好意的に声を掛けられたことがあった。勿論、男として女性に声を掛けられて悪い気はしなかったが、その半面、あきらかにゲイとわかる外国人の男性客に熱い視線を向けられることもあったが、そこは接客の仕事と割り切って、嫌な顔を見せずに適当に対応していたつもりだ。また、夏に真っ黒に日焼けして接客をしていたら、外国人の女性客に「あなたはベトナム人?」と真顔で聞かれ、ムツしなげに「No!」と答えたこともあった。

その中でも、あるミュージシャンのスタッフの一員として店に来た外国人女性客がいた。カリビアンだかスパニッシュだか忘れてしまったが、両親やその前の代から様々な人種が混ざっているそうで、肌の色は浅黒く、年齢は恐らく30代後半から40代前半といった感じ。髪を後ろで束ね、キャリア・ウーマンとも呼べるようなタイトなスーツを着こなし、色っぽくも見えた。オーダーを取った際に最初に名前を聞かれ、その後オーダーを取る度にチラチラと色っぽい視線を向けてきたが、勤務中で忙しくもあったので浮かれています暇もなく、接客を続けていた。

その後、休憩時間になり裏手で休んでいると、その女性がやって来て単刀直入に食事に誘われ、電話番号が書かれたメモを渡された。男として悪い気はせず、その女性をはじめ、ミュージシャンを囲むように座っていたそのテーブルの団体はみな音楽業界人っぽく、彼女もきっと音楽関係者に違いないから何か良いツテがあるかも…という気持ち、極貧生活を送っていたため美味しいものでも奢ってくれるかも…という気持ち、そして、勿論下心がなかったという嘘になる。

携帯電話やEメールなんてほんの一部の人しか使ってなかった時代。無視するのも失礼と思い、数日後に電話をかけ、週末に映画を見に行くことになった。その映画は確かウィル・スミスとマーティン・ローレンスが主演を演じた『バッド・ボーイズ』だったと記憶している。午後18時 8th Ave 沿いのポート・オーソリティのバス・ターミナル付近で待ち合わせとなった。

当日やや緊張しながら待っていると、行き交う人ごみの中から「ハイ！」とこちらに向かって微笑みながら歩み寄って来る女性がいた。一瞬「誰?」と思って凝視すると、もの凄い光景が目に入った。髪は派手な明るい茶色で巨大アフロとまではいかないが、もの凄いボリュームでライオン丸のように威嚇気味。口紅は真っ赤で、また着ている服が凄かった。ラメが入っているような光沢のあるブルーのワンピースのような服にハイヒールを履いていた。

本気で別人かと思ったが、そのティナ・ターナーな女性こそ、レストランで声をかけて来た女性。店で見えた印象とはまるっきり異なり、申し訳なかったが店で感じた30代後半40代前半の印象より更に10歳ほど上に見えるような感じ…。いろんな意味で結構ショックだった。また、肌も浅黒かったから、ストリートでも目立っちゃって仕方がなかった。その場で帰るなんて失礼なことはできなかったから、とりえずミッドタウンで映画を見て、その後タイムズ・スクエアのレストランで食事をしながら話をして時間が過ぎた。それなりに楽しくはあったが、ティナ・ターナーな印象は終始変わらず…。

昔日本人男性と付き合っていたとか、そろそろ子供が欲しいなんて話も聞き、最終的に今晚家に来ないかと誘われもしたが、そのティナ・ターナーな姿を見ていたら、何故だか日本にいる母親の寂しそうな顔が頭に浮かんで来て、結局そのまま家路に着いた。ラスベガスのホテルの最上階にコンドミニアムを持っているから今度一緒に行かないかなんて話も聞いたが、もしあのまま家に行っていたら、今頃悠々自適なヒモ生活を送っていたかもしれない…。懐かしい思い出です。